

① 「梅枝」語り

昔、当国天王寺に浅間と云ひし伶人あり。同じくこの住吉にも富士と申す伶人ありしが。その頃内裏に管弦の役を争ひ。互いに都に上りしに。富士この役を賜はるに依つて。浅間安からずに思ひ。富士をあやまって討たせぬ。その後富士が妻。夫の別れを悲しみ。常は太鼓を打って慰み候ひしが。それも終に空しくなりて候。

② 信濃なる 浅間の山も燃ゆなれば 富士のけぶりのかひやなからん 『後撰集』

③ 後聞。今夜右舞人忠右被討。借物大法事ニ伊勢と確執。忠右悪口之間公方被聞食被召捕。則被刎首云々。胡飲酒舞曲相伝者也。被経御沙汰討。天王寺有舞曲之間不可断絶云々  
『看聞御記』嘉吉元年二月二九日

聞、昨日忠右妻自害、家放火、然而家ハ打消無為。妻ハ死云々 同二月二二日

文保二年十月二十七日大嘗会、清暑堂の御神楽の拍子のために、綾の小路の宰相有時といふ人、大内へ参ると、車より降る程に、いとすくよかなる田舎侍めく者、太刀を抜きて走り寄るままに、あやなく討ちてけり。さばかり立ちこみたる人の中にて、いとめづらかにあさまし。さて拍子にはかに異人うけたまはる。大事ども果てて後、尋ね沙汰ある程に、紙屋川の三位顕香といふ者の、この拍子をいどみて、われこそ勤むべけれと思ひければ、かかる事をせさせけり。道に好ける程はやさしけれども、いとむくつけし。  
『増鏡』

④ 「いかにせん」といふ時ばちを右の手にとり、やがてかたばちを左へ渡シ、「花ニやどる」と云時太こに立向、「鶯」と云「ぐ」の字ニ右にて一ツどふどうちて、楽ニなる。笛吹出して、又笛ニ合ニツ打。口伝有。三番目ニ太このかしら打ごとくニ左右のばちを太この上へやり、打事ハ右計にて一つ打。其まゝたいはいして舞出ス。一返まはりて、ばちを静ニ居座へやり、扇をいつもの初段の所にてひろげて舞べし  
細川三齋手沢『江戸初期筆仕舞付三種』

樂のかゝり羯鼓打ちやう。ヒウル ヒウロラ リウロヒ ヲヒヤロルラ ヒヤリヤ  
ヒヤロイヨ ヒヤラ これ本樂の太鼓の打やうを出したるものなり

『隣忠秘抄』